

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H23. 9. 15)

1. 切断量の推移

(成品切板出荷+賃加工)

(単位:千ト)

項目	22年度			23年度		
	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	58 (1)	58 (1)	68 (1)	54 (2)	60 (2)	60 (2)
規格	473 (131)	484 (126)	447 (129)	434 (132)	460 (140)	490 (145)
合計	531 (134)	542 (127)	515 (130)	488 (134)	520 (142)	540 (147)

(出所)・実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

・カッコ内の数値は賃加工量で内数。

【コメント】

■ 23年度1Qの切断量(実績)は、前期比27千ト、5.1%減の488千トと2ヵ月連続減、前年同期比では6千ト、1.1%減と、微減ながら5ヵ月ぶりに前年水準を下回った。

■ 2Q(想定)は、520千トン程度(前期比+6.6%、前年比▲2.1%)と想定。

・ 7月176千トン(前年同月比▲2.7%) + 8月速報169千トン(同▲4.0%) + 9月想定175千トン(同▲3.4%) ≒ 520千トン

・ 20年度2Q: 653千ト、 21年度2Q: 406千ト、 22年度2Q: 531千ト

■ 3Q(想定)は、540千トン程度(前期比+3.8%、前年比▲0.4%)と想定。

・ 建設関連需要は前期比微増、建産機など製造業関連需要は同+15%、その他横ばいと想定して推計

・ 22年度期平均: 520千ト。同月平均: 174千ト。 3Q月平均: 180千ト。

・ 20年度3Q: 624千ト、 21年度3Q: 468千ト、 22年度3Q: 542千ト

■ 23暦年計(推計): 2,063千ト。前年比(2,035千ト) +1.4%。

(参考) 切断量(成品切板出荷+賃加工)の前年同期比の推移

20年度1Q: +6.3%、 2Q: +6.6%、 3Q: ▲3.3%、 4Q: ▲24.8%

21年度1Q: ▲34.1%、 2Q: ▲37.9%、 3Q: ▲25.0%、 4Q: ▲4.0%

22年度1Q: +13.5%、 2Q: +26.3%、 3Q: +15.8%、 4Q: +10.1%

23年度1Q: ▲1.1%、 2Q(想定): ▲2.1%、 3Q(想定): ▲0.4%

2. 業況

厚板シャア業界を取り巻く状況を概観すると、需要環境は依然厳しいものの、前回報告時点（6月）に比べると、先行きに少し明るさが窺えるようになってきた。すなわち、建産機関連需要は、震災直後、急激に停滞したが、6月以降、部品調達の入手難解消とともに急回復し、油圧ショベルや鉱山機械を中心にフル生産が続いている。下期計画においては、リーマンショック直前のレベルに匹敵する生産が計画される機種もある。

他方、切板需要の過半を占める建設関連需要は、今年に入り、橋梁・建築の2本柱が共倒れ状態となり、全体では過去最低の水準まで落ち込んだ。こうした底這い状況が続く中、年度前半は低調であった橋梁入札が9月から本格化することや、首都圏の大型建築案件も来年1月以降の本格始動に向け、一部案件が動き出そうとしている。これまで限界的な低操業を余儀なくされてきた建材系シャアの切断量は、年末から年明け以降にかけて回復傾向を辿るものとみられる。

次に、当組合の月次統計により切板需給を概観すると、出荷量は、昨年の後半は回復傾向を示したものの、年明け後は建設需要の減退が響いて、低調に推移している。ちなみに、1～7月累計では、前年同期比13%減の1208千トにとどまり、建産機の回復が建設需要の不振をカバーするまでに至っていない。一方在庫量は、5月末まで一貫して増加傾向を辿り、在庫率も適正レベル（200%以下）を上回って推移し、5月末は250%まで上昇した。その後6～7月は在庫が減少し、在庫率も6月末202%、7月末201%と適正ゾーンに接近している。

こうしたなか、母材メーカーの販売姿勢は、2極化の様相を呈しており、その値差は大きく乖離したままであり、急増する輸入材も加味すれば、価格体系は更に重層的になっている。このような状況下、シャア各社は、値引き要請を強めるユーザーに対する合理的な転嫁・説明に苦慮するとともに、逆ザヤ回避の一方策として、材料選定の多様化も視野に入れつつ、疲弊した経営基盤の立て直しに注力している。

全国のシャア各社の意見を整理すると以下の通り。（9/9 市場委員会）

- 公共投資の縮減と景気後退に伴う民間設備投資の冷え込みで暗い状況。（北海道）
- 生コン価格の下落で、建築物はS造・SRC造から、RC造に流れている。（北海道）
- ゼネコンの安値競争激化で、ファブの鉄骨単価の指値は極めてシビア。こうした中、母材価格の値上げが控えており、悲観的ムードが漂う。（北海道）
- 鉄骨需要の大半が中・小型物件で、秋口以降の物件は非常に少ない。（北海道）
- 被災しなかった一部地域のファブは、成約済み案件や建築延期案件の開始などで、秋口まではほぼフル稼働。（東北）
- 市場は今後も震災復旧需要がメインではあるが、本格的な復興新築物件は来春以降と思われ、それまでは大きく変わることはなさそう。（東北）

- 橋梁、建築にようやく薄日が差してきた。シャアの仕事に繋がるのは大半が4Q以降になるとみられ、それまでの備えをきっちりしておく必要がある。(東京)
- 建設不況がこれ以上長期化すると、経営に見切りをつけるシャアが出てくるかもしれない。(東京)
- 関東ではトンネル工事を中心に土木案件がかなり出てきている。地下の分野にはシャアの仕事がまだ潜在しているようだ。採算面の問題はあがある。(東京)
- 国内鉄骨に占める「輸入鉄骨」のウエイトが年々上昇するなど、最近鉄骨構成が大きく変化しており、強い危惧を感じている。(東京)
- ヒモ付きシャアの震災後の生産は、建産機向けを中心に月を追って回復したが、夏に入ると、親会社に合わせて、出勤日の変更のほか、中には1週間ずっと工場を操業するなど、以前よりも多くの経費がかかった企業も出ている。8月からは、円高の影響でユーザーからコストダウンを要求され、頭の痛い日々が続いている。(東海)
- 建材系シャアは受注減の中で苦慮しており、工場稼働は60%前後の低操業を余儀なくされ、雇用調整金の申請で何とか凌いでいる。小ロットの注文が多く、生産性が著しく低下している。また輸送コストのアップが負担になっている。(東海)
- 建機向けは繁忙だが、それ以外の分野は低調。また、震災の影響で止まっていた市中の建築案件が動き出し、町の鉄工所に急に仕事が入り、店売り向けシャアには、スポット的な小型物件が入り出している。(大阪)
- 高炉各社の値上げもあり、韓国材(コイルカット、厚板)の売り込みがきている。以前は中国材が多かったが、足元では韓国材(現代)が多い。(大阪)
- 大手ファブは、病院案件を中心に2~3カ月の山積みがあるが、それ以降の物件が全く見えない状況。橋梁は大きな物件なし。急激な円高と鋼材単価の値上げで、造船各社は新規受注が取れない苦しい状況が続いている。(九州)
- 建機需要は堅調に推移。工場稼働は70~80%程度。今後適正粗利をいかに確保するかが課題。(九州)

以上のように、2年以上にわたって需要不振に苦しむシャア業は、現状及び先行きへの不安を抱えながら、各社生き残りをかけて、この難局を何とか打破すべく頑張っている。

需要動向を概観すると、

(1) 建設機械は、震災により寸断されたサプライチェーンの復旧とともに好調さを取り戻し、油圧ショベルや鉱山機械を中心に急回復している。23年度の需要も、20%近い伸びが見込まれており、ユーザー各社においては、下期生産計画を大幅に上方修正する動きが目立っている。国内では震災復興需要がこれから顕在化するとみられるが、最大市場の中国向け需要が下振れしており、先行きへの不透明感が広がりつつある。

重電関係は、原発事故により国内の原発案件はすべて中断・延期しているが、米国向け案件は計4基の受注があり、長期の安定加工が見込まれる。また、原発の代替として、火力発電の再稼働・増設関連の受注が増加し、とくに変圧器増強工事への期待は大きい。

(2) 建設分野については、まず橋梁は、1Qの入札量が極端に少なかったこと等により、ファブの受注量は全国的に激減し、足元のシャー切断量も過去最低の水準まで落ち込み、苦しい操業が続いている。23年度の同発注量は、前年度並み（28万ト程度）レベルがほぼ確実視される中、本年度の入開札は、9月以降本格化するものと見込まれる。ただし、これが即刻シャーの切断量には結びつかず、早くて12月以降になるとみられる。

一方、首都圏の大型建築案件は、一部の案件が動き出すものの、大半の物件は来年1月以降であり、シャーの切断量もそれまでは低調に推移するとみられる。

また、受注単価は、橋梁・鉄骨ともにゼネコン間及びファブ間競争の激化で低迷し、採算は非常に厳しい状況にある。

(3) 一般店売り分野については、製造業部門の回復など、一時に比べると多少明るい兆しが窺えるものの、主要分野の建築不振が響き、相変わらず惨憺たる状況が続いている。各地区とも小ロット、短納期の商いが中心で荷動きは低調に推移しており、シャーの稼働も40～50%の低操業を余儀なくされている。

また母材価格は、三極化の様相を呈しており、これが受注・契約及び仕入れ等をますます難しくしている。

次に、母材供給面については、国内のメーカー・ロールは外需増大等を主因にこれまでタイトな状況が続いてきたが、現下の急激な円高を背景に、韓国・中国材の入着が急増するなど、足元の供給事情に変化が生じつつある。

また、7月以降設備の定修・トラブルや節電対策等が重なり、これら諸要因が今後の厚板需給にどのように影響を及ぼすのか注視する必要がある。

一方、全国各地の店売りマーケットは、需要の低迷に加え、高炉材・電炉材・輸入材の価格3極化や、需要家からの値引き要求が相次ぎ、厳しい状況が続いている。シャーはこの狭間で、仕事量確保を優先した採算割れの取引を余儀なくされるケースも出ている。実勢から乖離して高止まっている母材価格。来期以降のメーカーの販売スタンスがどうなるのか、価格差がさらに広がるのか、最大関心事となっている。

なお、シャー業界における当面の主要課題は、以下の通りである。

- ①建設分野を中心とする需給ギャップ問題
- ②母材価格3極化への対応
- ③適正加工賃の確保
- ④与信管理、雇用対策（助成金の申請、等）
- ⑤コンプライアンス対応（品質証明、独禁法、輸送条件問題、等）。
- ⑥円高進行と製造業の国内空洞化
- ⑦建築分野における輸入鉄骨問題

3. 足元の主要需要部門の動き

(1) 橋梁・建築鉄骨の動向

【全 体】

足元の橋梁・鉄骨需要は、著しい落ち込みを示し、建材系シャーは非常に厳しい状況に直面している。このため一部シャーは、土木関連（セグメント等）物件や産機需要対応で、急場をしのいでいる。

今後の動向は、橋梁・鉄骨需要の回復が見込まれることから、切板切断量も3Q後半以降増加に転ずるものと予想される。ただし、それまでの期間は、一部の鉄骨案件やセグメント等の土木物件を受注したファブ及びシャーを除き、低操業を余儀なくされるとみられる。

また、ゼネコン間の競争や、ファブ間の競争により、鉄骨、橋梁ともに受注単価は低迷しており、採算は非常に厳しい状況。

【橋 梁】

22年度の入札量が大幅に減少したことに加え、本年度1Qの入札量も極端に少なかった。加えて、震災復旧で補修関連需要に動意があったものの、ごく少量にとどまったことから、各ファブの手持ち仕事量は、昨年度を下回っている。この結果、各シャーの橋梁向け加工量は、過去に例がない低レベルで推移しており、苦しい操業が継続している。

また、23年度の橋梁発注量は、前年度並み（28万トン/年）であることがほぼ確実視され（公表ベースで既に24万トンに達している）、9月以降入開札が本格化する見通し。関東地区物件も多く、ファブ及びシャーの期待大。ただし、「開札＝即切板発注」とはならないので、切断量の回復は、早くも12月以降であり、それまでの間は低操業が継続する見込み。

【鉄 骨】

昨年度に立ち上がった首都圏の大型案件は、今年1月にピークアウトし、数量が激減した。さらに、一部のゼネコンは、海外からの輸入鉄骨の購入を積極的に推奨しており、数量減に拍車をかけている。

2Qの切断量は、一部の首都圏案件（大手町開発等）が動き出すことから、極めて低いレベルであった1Qに比べると、若干回復する見込み。ただし、大型物件（読売新聞25千トン、ヤマト運輸25千トン、佐川急便15千トン等）の本格的動意は、H24年1月以降であり、それまでは本格回復には至らない見込み。

(2) 建産機・重電・金属工作機械の動向

【全 体】

製造業は、大震災後のサプライチェーン回復から好調さを取り戻し、とりわけ建機は絶好調と言える。一方で産機店売りは、長期的な低迷から未だ回復できず、脱出の糸口さえ見えない。しかしながら、その製造業においても、世界的な景気減速懸念や直近の急激な

円高等で、急速に不透明感が広がり始めている。

関係シャーは、ここ数年の間に受注の急減を何度か経験しているだけに、足元の高操業に浮かれてはられない心境である。

【建設機械】

建設機械工業会の出荷統計によると、7月実績は3月の大震災の影響を受けたにも拘わらず、堅調な外需に支えられ19カ月連続の増加となった。今年度の需要予測においても、前年度比+18%で3年連続の増加を見込んでいる。

国内では復興需要がこれから顕在化すると見られているが、最大市場である中国向け需要が下振れしていることもあり、先行きは不透明。

①油圧ショベル

部品調達、節電対策等の不安はあったが、6月以降生産回復しフル生産が続く。9月以降はさらに高い生産計画を立て、リーマン前の80%レベルまで回復。昨年度比+35%。

②建設用クレーン

ラフテレーンは一部復興需要とみられる受注が急増。3～5月は生産が停滞したものの、6月以降急回復。10月以降はリーマン前のレベルの生産計画となっている。

クローラクレーンは依然低迷が続いているが、復興需要等で早く今年度下期からの増加を予想する見方もあり、今後期待したい。

【鉱山機械】

大型ダンプは好調を持続。足元はリーマン前の台数まで回復し、さらに下期はそれの約30%増の生産計画となっている。また上位大型機種も合わせて増産傾向。

超大型ショベルもほぼ同様高操業が続いており、下期さらに台数を上乗せ計画。

【重電】

需要家により状況は大きく異なり、一様ではないが、原発事故による国内案件が中断・延期となったことによる影響は共通している。

代替としての火力発電の再稼働・増設関連受注が増加しており、特に変圧器増強工事は今後期待大。

また米国向け原発案件の4基は予定通りであり、長期の安定加工が見込まれる。

【板金・鍛圧機械】

鍛圧機械工業会発表の受注動向では、プレス機の海外向けが急減しているものの、関連シャーの足元の稼働は堅調を持続しており、自動車向け中心の個別機の不振をピーク時の70%と好調な汎用機でカバーしている。

ベンダー・タレパンの板金機械は、4月以降リーマン前の85%程度まで回復し、好調を持続している。

【トラック・トレーラー】

トラック及び乗用車向けは、ほぼ似たような動きとなっており、6月から引き続き高操業で推移し部材用の切板やブランキング部品も好調。

トレーラーは、復興需要関連の重機積載用として受注が増加している。

ダンプも震災の瓦礫撤去用としてフル生産状態。当初の4トクラスの小型ダンプから、現在では10ト以上のものに需要が移行している模様。

【産機店売り】

長期に亘る受注低迷から脱出できず、量・単価とも経営に深刻さを与えている。

【参考】 成品切板の最終用途比率（平成21年3月出荷分。厚板シャワー工組調べ）

・ 建 築 用 :	37%
・ 土 木 用 (橋梁、鉄塔等) :	17%
・ 建産機用 :	26%
・ 輸送機用 (船舶、自動車) :	8%
・ 重電用 :	2%
・ その他 (鉄道車両、容器、二次製品)	10%

全国厚板シヤリング工業組合

シヤ業の厚中板在庫推移

(H23.09.15)

組合員の厚中板在庫推移(166社・6事業所／自社所有分)

(単位:千トン)

項目	22/9末	12月末	23/3末	6月末	9月末	12月末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	357	349	365	370	360	350
前期比/量	29	▲8	16	5	▲10	▲10
前期比/%	108.8	97.8	104.6	101.4	97.3	97.2

【コメント】

- 在庫量は、昨年12月以降、建設需要の減退を主因として、6カ月連続の増加を示し、5月末には381千トンと、21年10月以来の高水準に達した。しかし、6、7月末は、需要の底入れと安定的な仕入れにより、再び減少に転じ、36万トン台で推移している。
- 一方、在庫率は、今年初めまで一貫して適正在庫率200%を下回って推移したが、2月末以降急上昇し、5月末には249.5%に達するなど需給緩和が一気に表面化した。しかし、その後建産機部門の回復もあって、6月末202.3%、7月末200.7%と、月を追って過剰感が薄れつつある。
- 今後、建産機分野の堅調持続と建設需要の回復が見込まれる中、シヤ業者が需要に見合った仕入れ姿勢を堅持すれば、在庫量は9月末から12月末にかけて、35～36万トン台で、漸減傾向を辿るとみられる。
- 在庫率も、月間出荷量が18万トンレベルで推移すると仮定すると、9月末～12月末の在庫率は、200%割れの適正圏内まで低下するものと予想される。
- 需要全体は引き続き低調に推移すると思われるので、今後とも在庫管理には細心の注意が必要である。

以上